KANAGAWA
NEWS LETTER 2015. 1. No. 40
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話 (045)481-5661(代) 神奈川大学言語研究センター

「シンポジウム・ユーラシアを研究する『言語教育におけるレアリア～ロシア語と日本語』」の開催について

堤　正典

2014年度神奈川大学国際交流事業として採択された「シンポジウム・ユーラシアを研究する『言語教育におけるレアリア～ロシア語と日本語』」が言語研究センターの主催により7月12日（土）に本学横浜キャンパスで開催された。これは、2012年3月の「シンポジウム・ユーラシアを研究する『日露の交流と言語教育～ロシア語の新たなる国際性』」（言語研究センターと当時活動していたプロジェクト研究所「ユーラシア研究センター」の共催）の続編にあたるもので、ロシア語教育・日本語教育におけるレアリアをテーマとした。

レアリアは言語を使用するにあたって必要となる言語文化に関する知識であり、それを欠くと円滑なコミュニケーションに支障を来すものである。

ロシアから本学協定校の国立アストラハン大学日本語講師（当時）の小林潔氏、同大学准教授アリーナ・サヴィノワ氏、ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員アレキサンダー・コスチルキン氏の3名をお招きした。小林氏はロシア人に対する日本語教育と日本人に対するロシア語教育の経験をもち、あとのお二人はロシア人の日本語教師である。また、3名とも優れた言語研究者である。日本側は、筆者の他に、コメンテーターとして、本学で日本語教育を担当する高木南欧子特任准教授、ロシア語教育からは慶応大学専任講師の朝妻恵里子氏と東京外国語大学非常勤講師の阿出川修嘉氏が登壇した。

神奈川大学の石積勝学長による開会挨拶のあと、4件の報告があり、筆者による「外国語教育とレアリア」、小林氏による「日露の異言語教育現場から見るレアリア」、サヴィノワ氏による「文化コンセプトとレアリア－外国語教育における言語文化学の役割－」、コスチルキン氏による「日本語基礎動詞の本来的使用－ロシア出版の教科書の観察から－」と続いた。その後コメンテーターからの意見、全体討論と、白熱した議論が行われた。

レアリアについては、必要性は明らかであるが、どのように教育するか（あるいは教育すべきか、実体験ではなく教育が行えるか、など）はノウハウがあまりなく、各教員に任せられている部分が大きい。今回は、問題の所在の確認と具体的な要検討事項の提出が行われたと言ってよいだろう。

予想外の参加者があり、企画者として大変うれしく思い、今後もこのテーマの議論を続けていきたいと考える。

（外国語学部教授・言語研究センター所長）

「天才でごめんなさい」は詫びているのか
―ことばの現代アート―

彭　　国　躍

2年ほど前に森美術館で現代アートの展覧会が催された。その作品内容について賛否両論が巻き起こり、ある市民団体から抗議され撤去を求められることもあった。私は、作品内容以上に、展覧会のポスターで画家本人の土下座写真とタイトル「会田誠展：天才でごめんなさい」に興味をそそられ、思わず「すごい」と呟いた。含意形成のメカニズムを研究する者として、その発話の本質について論証する衝動に駆られた。

まず、謝罪発話行為の本質とは何なのか。会田誠はこれで詫びているのだろうか。

語用論における発話行為理論に基づけば、謝罪発話行為の遂行には、少なくとも次のような前提条件（「適切性条件」の一部）が満たされる必要がある。

事前条件：話者が相手に不利益を与えた。

誠実条件：話者が当該行為に対して責任を認め、後悔し、償いや再発防止を約束する。

会田誠は発話の受け手（鑑賞者または社会）に「天才である」という事実により不利益をもたらしたのだろうか。そして、彼はそれに責任を認め、悔いの念を抱き、弁償や改正の約束までしているのだろうか。いや、しているとは思わないと答えると、では、「ごめんなさい」を使ったこの発話は一体何だったのだろうか、ということになる。

私は、かつて謝罪発話行為について大きく、適切性条件が満たされる場合の「真性型謝罪」と、謝罪のことばを使いながら適切性条件が満たされない場合の「擬似型謝罪」に分けた。そして、後者をさらに、利他性に動機づけられる「親善型謝罪」と、利己性に動機づけられる「偽善型謝罪」に細分した。「親善型謝罪」とは、「テーブルが狭くてすみませんね」、「ごめんなさいね。景色が悪くて」などのように、加害責任がないにもかかわらず、相手が感じる不便、不快や失望に対して責任を感じ詫びるケース、「偽善型謝罪」とは、加害事実や責任を問われるのに、それを認めようとせず、本件に対する責任追求をかわそうと、弁償や改正の義務が生じない別件（世間を騒がせたことなど）を立てて詫びるケースが想定される。「偽善型謝罪」は、「別件謝罪」とも呼び、保身の武器として「謝罪のことばもない」という非難を封じ込めるのに効果的である。[注1]

かりに会田誠の謝罪は真性型ではなく、擬似型だとする。すると、それは親善型と偽善型のどちらにもすんなり嵌らないという問題が生じる。責任を負うべき加害事実がないという点では親善型に似ているが、非を認めず悔い改めないまま謝罪のことばを使うという点では偽善型にも似ている。発話行為理論は日常言語の分析のために考案されたもので、非日常的、非現実的なケースは想定外である。「天才でごめんなさい」にはまさにその非日常性により通常の謝罪表現より複雑な含意構造が作り出されている。その複雑さはこの発話に内包される２つの相反する価値含意の衝突に起因すると私は考える。

「天才」とは「生まれつき備わったすぐれた才能。また、そういう才能をもっている人」（『広辞苑』）を指す。このことばが持つ「すぐれた才能」というプラスの価値含意のため、人への賛辞として使うことはあっても、自分自身に対して使うことに

大抵の人は抵抗を感じる。その抵抗は、たとえ自分が天才だと思っていても、人間社会の言語行動における普遍的な原理の１つ「謙遜の原則」（Modesty Maxim）[注2]の存在を感じ取っているからである。

もしある人が現実の社会で自分が天才だと思っていることを本気で主張したとしたら、どうなるのだろう。まず、「謙遜の原則」の違反により、その発話から字義的意味の外にその人が世の中を見下ろすという「傲慢」含意が生まれる。そして「尊大な奴」としてまわりの人や世間からバッシングを受けることになろう。もしバッシングから逃れようとすればどうするのか。少なくとも２つの方法がある。もっとも手っ取り早い方法は自分が天才だと思うこと、またはその主張をおもてに出すことをやめる。もし主義主張も曲げたくなければ、バッシングも受けたくない場合はどうするのか。もう１つの方法がある。つまり、主張を変えないままひたすら謝る。たとえ反省していなくても責任を認めなくてもとにかく頭を下げて詫びる。そうすることにより、天才を自認する行為に含意される傲慢さと、詫びる行為に付随する低姿勢が１つの発話に共存するという非現実的、非日常的な発話行為が生まれる。

このように作り出されたことばは、ある意味において、正面と側面の合成、前景と背景の交錯など２つの相反する視点を１枚の絵画に押し込むピカソのキュビズムやマグリットのシュールレアリズムなどのモダンアートが持つ非現実的、非日常的な表現手法に相通じるものである。

ピカソ「ドラ・マールの肖像」1937年

ルネ・マグリット「白紙委任状」1965年

もし、会田誠は、疑似型謝罪ではなく、誠心誠意に真性型謝罪を遂行しようとしていると解釈したら、どうなるのだろう。誠実条件により、彼は天才であることを悔い改め、二度と天才的な発想や言動をしないことを約束したことにならざるを得ない。そう解釈することにより、含意された別のメッセージが現れてくる。すなわち、社会の空気が読めない天才たちが土下座させられ均され潰される現実に対して一種の警鐘を鳴らすという含意が創出されることになる。

「天才でごめんなさい」には、このように会田誠の前衛芸術の本質が隠されていると私は解釈する。

注1：彭国躍2005「現代日本語の謝罪発話行為の類型と機能」（『日本語学』Vol.24 明治書院）

注2：Leech, Geoffrey N. 1983 Principles of pragmatics Longman Group Limited, London 池上嘉彦,河上誓作訳『語用論』1987 紀伊國屋書店

言語研究センター共同研究

音響機器等を利用した英語音声教育のための予備的調査（継続）

小松雅彦／松村文芳

近年、技術的な発達によって、さまざまな音声分析のための機器が従来に比べて廉価で利用できるようになってきている。本研究プロジェクトでは、それらの音響機器等を利用した英語音声教育教材を作成するための予備的調査を行っている。2年目となる本年度は、おもに、調音動作の計測機器について調べている。

発話の観測には種々の機器が用いられる。しかし、これらの手法については広く知られているとは言い難く、最近、手法を紹介するシンポジウムが開かれた[1]。そこでは、X線マイクロビーム、磁気センサシステム、MRI（磁気共鳴画像）、PGG（光電気声門図）、EGG（電気声門図）、高速度カメラを用いた研究の実例が示されるとともに、その他の研究手法も含めて最近の動向が紹介された[2]。

NDI Wave Speech Research System
（写真提供：アドバンストシステムズ株式会社）

最近では、磁気センサシステムを用いて、リアルタイムに調音動作を話者にフィードバックするシステムの研究も進んでいる[3, 4]。

実験の様子

本プロジェクトでは、これらの情報を収集するとともに、特に、磁気センサシステム（NDI Wave Speech Research System）[5]に注目している。同システムは、おもに舌動態を観測するためのもので、侵襲性が無く、運搬可能で、操作が容易であるという利点がある[2]。また、実験にかかる費用も、他の高価なシステムと比べると、かなり安い。

本年度は、実際に、NDI Waveを用いて、データを採取する予備的な実験を行った。実験の目的は、同システムによる調音運動観測と音声学教材作成の実行可能性を調べることである。被験者は2名で、IPA（国際音声記号）を読むタスク等を行った。データの解析や評価は、今後行っていく予定である。また、本研究プロジェクトの終了後とはなるが、MRIによる実験との比較等も行っていきたい。

[1] 林良子（企画）（2014年6月）『音声生成の観測と言語研究への応用：調音音声学，発声学への招待』日本音声学会第329回研究例会，神戸大学.

[2] 北村達也（2014年6月）調音観測の最近の動向：まとめとその他の研究手法．シンポジウム『音声生成の観測と言語研究への応用：調音音声学，発声学への招待』日本音声学会第329回研究例会，神戸大学.

[3] Katz, W., et al. (2014). Opti-Speech: A real-time, 3D visual feedback system for speech training. *Proceedings of Interspeech 2014*, 1174-1178.

[4] Katz, W. (2014, September). *Exploring visual feedback in speech production.* Lecture at Sophia University, Tokyo.

[5] Berry, J. J. (2011). Accuracy of the NDI Wave Speech Research System [Research Note]. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research, 54*, 1295–1301.

＊･＊

言語研究センター共同研究

節周辺部と節構造

佐藤裕美／辻子美保子／加藤宏紀／片岡喜代子／相原昌彦

テンス、アスペクト、モダリティ、文タイプなどに関わる節周辺部の構造、それぞれに関わる機能範疇の語彙的特性や言語間、同一言語内における多様性のパターンについて、英語、日本語、中国語、スペイン語、イタリア語などに観察される現象を考察し、節構造と関わる普遍的性質、個別言語的特徴について説明することを目的としている。9月11日に南カリフォルニア大学の傍士　元氏をお招きし、講演会を開催した。講演では、Oxford大学出版局より近日刊行予定である、傍士氏の著書Lanuguage Faculty Scienceの内容を出版に先立って紹介して頂いた。いかにして言語機能が厳密科学として研究可能であるか、またその意義について述べられ、仮説の経験的な裏付けのために行われる一連の実験の具体例をご説明下さった。本研究グループのメンバーのみならず、他大学の教員、大学院生も多く出席し、活気のある講演会となった。11月以降はメンバーによる研究発表を数回行うことを計画中で、来年度の研究報告書出版に向け準備を進める予定である。

言語研究センター共同研究

無声ビデオを用いたナレーションによる英語プレゼンテーション、ツアーガイド演習に関するケーススタディ

ソリス・メイビクトリア　セリノ／佐藤裕美

プレゼンテーション訓練用の視覚資料としての使用目的で、ビデオ撮影を行った。主に夏期休暇期間に渋谷周辺でビデオ撮影を行い、スピーキングの授業でビデオの映像について英語で説明する、日本の風物などを紹介したビデオ映像のナレーションを英語で行う、等の目的で使用できるように、適切な編集を行う予定である。上野、浅草、お台場など東京で人気のある場所のビデオ撮影を今後も継続し、ケーススタディを行う授業で使用するために教材のヴァリエーションを増やしたい。

＊･＊

言語研究センター共同研究

日本語・韓国語教育における漢語動詞の研究

高木南欧子／尹亭仁

韓国語と日本語は、文法構造や語彙の類似点が多く、相互に学習が有利な言語と言われている。しかし、その類似性ゆえに母語の干渉を受けやすく、母語の影響から生じる誤用が見過ごされる傾向にある。日韓両言語には共通して漢語が存在するが、意味・用法の違いに関する研究の積み重ねは、未だ十分であるとは言えない。効率的な学習デザインを考える上でも、両言語における漢語の対照研究や、言語活動において必要とされる漢語の異なり語彙数の調査などといった全体把握のための基礎的な研究が必要である。

2014年度に行った漢語動詞の調査では、韓国語、日本語、それぞれを基準とした場合の対応関係を見た。韓国語の2字漢語＋하다（スル）が、そのまま日本語において2字漢語＋スルにならない漢語動詞を見ると、不一致のタイプは6つに分類されることが明らかになった。また、その中でも、日本語には2字漢語＋スルの形が存在せず、名詞形しか存在しないことによって意味の不一致が起きているものが全体の約4割を占めていることが分かった。反対に、日本語の2字漢語＋スルが、韓国語において2字漢語＋하다（スル）にならないケースを見ると、不一致のタイプの分類は8つであった。言語教育の現場においては、誤用を防ぐために、「正の転移」「負の転移」につながりうる漢語動詞のリストの作成、各レベルにおける習得目標語彙数の策定、辞書などの見出し語の選定および提示の仕方の再考、コロケーション情報の提示などが必要であるとの提言を行った。

また、遂行課題の難易度と使用漢語の語彙数に関しては、韓国語を母語とする日本語学習者の発話の調査分析を行った。そこでは、上級レベルの話し手は、中級レベルの話し手より使用漢語数が多いことが観察され、使用漢語におけるGuiraud値は、上級レベルの話し手の方が数値が高い傾向にあり、より多くの語彙を習得していることが確認された。各レベルにおいて使用された漢語の特性を、抽象度や話題との親密度などの観点から分

析した結果、語彙の理解は、直ちに語彙の運用につながるのではなく、学習や環境による影響が話し手に与えられた結果、運用につながる可能性があることが示唆された。

＊･＊

言語研究センター共同研究

中国語ホームドラマを題材とする語気詞“呢”の研究と応用

研究代表者：加藤宏紀

中国語は文末の語気詞を用いて多様な意味を表現することができ、その使用頻度は高く、使用範囲も広い。また、中国語の教科書においても、そのレベルを問わず、語気詞を用いる文がしばしば現れる。使用頻度も実用性も高い語気詞ではあるが、研究においても教育においても、語気詞はその中心部分として扱われる傾向に乏しいのが現実である。

本研究グループでは教育と研究を結びつけながら、語気詞“呢”に焦点を当て、この語気詞に関する研究の充実とその教育への応用を目的として、それぞれの研究を進めている。

現在は中国語のホームドラマ《家有儿女》から語気詞“呢”の使用場面を、映像とテキストの両面から収集している段階にある。データ収集後は、メンバーに提供し、それぞれの分野・視点から語気詞“呢”の分析をすすめる計画である。

＊･＊

言語研究センター共同研究

『良友』画報と上海文学

孫　安　石

『良友』画報を取り上げた本研究は、2007年9月に雑誌『アジア遊学』に『良友』を取り上げた特集号（勉誠出版）を出版し、2009年4月に（1）『良友』と『永安月刊』の講読会、孫安石「North China Heraldと中国の北伐関連記事」を開催し、7月には（1）中村みどりの書評「厳安生『陶晶孫その数奇な生涯―もう一つの中国人留学精神史―』（岩波書店、2009年）レビュー、（2）趙怡「金子光晴・森三千代と上海について」、（3）後藤「香港における40年代映画の収蔵、修復」などを開催することができた。

2014年には6月に非文字資料センター主催の租界班研究会において孫安石が「上海新報」について報告を行う際、上海の『良友』画報の研究状況について報告し、7月18日に行われた商業ポスターの報告（田島奈緒子氏）においても『良友』関連のポスターについて紹介する時間を持つことができた（http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/を参照）。また、12月5日に開催された非文字センターの租界班の拡大会議においても「『占領者日本の「支那」女性像と抗戦中国の女性像：『北支画刊』・『北支』と『良友』から考える』」松本ますみ（室蘭工業大学）」の報告が行われた。

2015年度には学内共同研究助成に応募するなど外部資金の導入により、さらなる研究会の活性化を図りたい。

言語研究センター共同研究

スペイン語を専攻する学生のための教材研究

バロン・アルトゥーロ

我々の研究グループの研究テーマは、外国語学部スペイン語学科の学生向けにヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR / スペイン語でMCER）の A1 および A2 レベルをカバーする会話教材を開発することである。

2014年度は、スペイン語の教育とスペイン語圏の文化の普及を目指して設立されたセルバンテス文化センターで定められたガイドラインおよび2年前から1年次の授業で使用している会話のテキストを参照し、文法・機能の両面から1年次に適した学習事項や1年次で修得すべき基礎語彙を吟味し、その一覧の作成を行った。また、外国語教育のテキストとして工夫が必要ないくつかの点――すなわち指示文や説明文に日本語訳を付けるかどうか、文法用語をどのように提示するか、文法補遺は必要かどうか、学生の自宅学習に必要な情報をどう組み込むかなど――の検討にも取り組んでいる。

今後は、モデル原稿を作成して具体的な問題点をグループで話し合い、この研究が目指す、学生の学修にとって最も効果的なテキストの開発につなげるべく議論を続けていく予定である。

＊･＊

言語研究センター共同研究

「外国語学習・教育におけるレアリアの具体的教育内容に関する研究」経過報告

堤　　正　典

2014年度にはロシア語の初修レベルでのレアリアの学習内容について検討を続けた。特に、学習語彙との関係に注意を払うべきであることが分かった。初修レベルにおいてでさえ、個々の語の意味用法にレアリアの知識が関わり、それが必要なものも少なくない。もちろん、初修レベルではなるべくそのような説明が不要な語や表現を多くすべきではあるが、そのような語ばかりではテキストなどの教材を構成することはかなり難しい。また、レアリア的知識が必要な語や表現を適宜取り混ぜて学習させることも、ロシア語に慣れさせるには必要なことである。レアリア学習から見て、どのような語や表現を取り上げるべきかをさらに検討したい。

また、7月13日に、神奈川大学国際交流事業として、ロシアからも研究者を招き、国内の研究者の参加も得て「シンポジウム・ユーラシアを研究する『言語教育におけるレアリア～ロシア話と日本語』」を開催した。言語教育におけるレアリアについての諸相について報告・討論があったが、特にこのシンポジウムによって、日ロ両言語で、一方で基本的な語彙が用いられる表現が他方ではより高いレベルで学習する語彙によってのみ表されていることが多々あり、このような言い回しや発想の違いはレアリアの知識が関わることに改めて注目させられた。